

英国王ジョージ6世のスピーチにおける ワードペアの劇的効果

青木 繁博

Dramatic Effects of Word Pairs in George VI's Speech

Shigehiro Aoki

0. はじめに

safe and sound, *sooner or later* などの英語並列表現（ワードペア）は、「2語が *and* などの接続詞によって結ばれた慣用表現・定型句」などとされることも多い。しかし、このことは公的なスピーチのように大きな効果を上げようとする場合には必ずしもあてはまらない。本論文は英国王ジョージ6世の第二次世界大戦開戦の際のスピーチを対象に、そこに見られるワードペアをコーパス言語学のいくつかの手法（Google検索、辞書データの活用）を用いて分析する。国王が国民に向けて開戦について語るという歴史的背景は、このスピーチで使われた表現の1つ1つが決して“その場の思いつき”や“陳腐化された”ような類のものではないことを明示している。時間にして約5分40秒、407語ほどの短いスピーチの中には17例のワードペア表現が用いられているが、これらの用例の傾向および特徴は一般的なワードペアの見方からは隔たっている。こうした観点から、ワードペアは言語表現あるいは表現技法としても、より一層の考察が必要であることを主張する。

先行研究の多くは上記のような並列表現を *irreversible binomials* などと呼び、基本的には語順が固定された表現を扱うものであった。現代英語に関する包括的な研究の代表的なものとしては Malkiel と Gustafsson が挙げられる。また須部は『リーダーズ英和辞典』に見られる語順固定の表現を詳細に分析している。

これらに対して本論文では、語順が固定されたものや慣用的に用いられているものに限らず、2項目以上の語句が結び付けられた表現をワードペアと呼び、広く扱うことにする。このことを通じて、あえて語順が逆に用いられた表現、既存のペアに別の語句が加えられた表現、新たに生み出された表現などを捉え、それらの表現がなぜ用いられたのかを考察することが可能になると考えられる。

1. ジョージ6世のスピーチとワードペア

1. 1. 公的なスピーチとワードペア

公的なスピーチの中にワードペア表現が多く認められること自体は目新しい指摘ではない。例えば須部は全体としては語順固定の表現を対象としているが、一節を割いてエリザベス2世によるスピーチの一部を分析し、語順固定の表現に加えて、広く対句と捉えられる表現も含めた関連表現が多用されていることを指摘している。

しかし、特定のスピーチの全体をワードペアという観点から考察した研究はほとんど見当たらない。スピーチを、短いながらも1つのテキストと捉えるならば、テキスト全体に寄与する部分としてワードペアは機能しているといった見方が可能になるはずである。これが本論文において目指すところである。

1. 2. 本論文で扱うジョージ6世のスピーチについて

本論文では、英国王ジョージ6世が1939年9月3日（対ドイツ開戦の日）に行ったスピーチにおけるワードペア表現を考察する。それに先立って、この有名なスピーチの背景と関連情報についてかたんにまとめておく。

当該のスピーチは第二次世界大戦開戦を象徴する出来事として、戦後数十年を経てなお言及されるような重要なものである¹。さらに近年では、アカデミー賞で作品賞などの主要部門を受賞した映画『英国王のスピーチ』（原題：*The King's Speech*）にも取り上げられたことで、再び注目が集まったものでもある。映画は事実に基づいてはいるが、もちろん全てのシーンやエピソードが史実という意味ではなく、当該のスピーチに至る経緯にもフィクションの部分があると推測される。それを別にしても、当該のスピーチ自体は、一国の国王が戦争への心構えを国民に向けて説くという、極めて重大な意義を持つものと言える。

なお本論文は、映画の中で再現されたスピーチではなく、実際のジョージ6世のスピーチにのみ焦点を当てて論じるものとする。

1. 3. スピーチ音声とそれを転写したテキストの異同に関して

スピーチ音声そのものは、ラジオ放送元であるBBCのサイトに紹介されている²。またYouTube等のサイトにも音声ファイルがアップロードされているような現状である。

当該スピーチをテキストに転写したものについては、イギリス王室の公式サイトにアップロードされているPDFファイルがある³。これを本論文ではテキストとし、引用・言及する際には全てそちらの内容に基づくものとする。

なお、前述PDFファイル以外にも見られるテキスト転写ファイルの中には、綴り字、句読点、その他

1 http://news.bbc.co.uk/2/hi/special_report/1999/08/99/world_war_ii/429704.stm [アクセス日時：2013年2月13日]
(記事自体の日付は1999年9月3日)

2 <http://www.bbc.co.uk/archive/ww2outbreak/7918.shtml> [アクセス日時：2012年12月21日]

3 <http://www.royal.gov.uk/pdf/georgevi.pdf> [アクセス日時：2013年1月26日]

の記号の使い方などに相違点があるものも存在する。それらは映画がヒットした影響からか、様々なサイトで見ることができるが、多くについては引用の経緯などに信頼がおけるかは定かではない。

1. 4. スピーチでの位置を特定する際に参照する行数および段落分け

もちろん音声には行や段落はないが、当該PDFファイルにおけるスピーチの原稿は、行数は30行、5段落と最後に祈りのことばといった構成になっている。以下の考察で特定のペアがどこに位置するかなどを分析することに先立って、ここではおおまかにPDFにおける行と段落との対応を確認しておく。

第1段落：1行目から4行目まで

(In this grave hour, ... and speak to you myself.)

第2段落：5行目から10行目まで

(For the second time ... to any civilised order in the world.)

第3段落：11行目から19行目まで

(It is the principle ... would be ended.)

第4段落：20行目から22行目まで

(This is the ultimate issue ... to meet the challenge.)

第5段落：23行目から29行目まで

(It is to this high purpose ... we shall prevail.)

祈りのことば：30行目

(May He bless and keep us all.)

2. ジョージ6世のスピーチに見られる17例のワードペア

まずはジョージ6世のスピーチに見られる17例のワードペア表現を、一覧性を持つように、なおかつ文脈がある程度わかるように心がけて、前後も含めて抜き出してリストアップする。このリストではイタリックにした箇所がペアとして対応していると考えられる部分である。

(1) every household of my peoples, both *at home* and *overseas* (1-2行目、第1段落)

(2) *cross your threshold* and *speak to you myself* (3-4行目、第1段落)

(3) *Over* and *over* again (5-6行目、第2段落)

(4) the differences between *ourselves* and *those who are now our enemies* (6-7行目、第2段落)

(5) to disregard its *treaties* and its *solemn pledges* (11-12行目、第3段落)

(6) which sanctions *the use of force*, or *threat of force* (12-13行目、第3段落)

(7) against the *sovereignty* and *independence* of other states (13行目、第3段落)

(8) the freedom of *our own country* and of *the whole British Commonwealth of Nations* (16-17行目、第3段落)

(9) all hopes of *settled peace* and of *the security of justice and liberty among nations* (18-19行目、第3段落)

(10) the security of *justice* and *liberty* among nations (19行目、第3段落)

(11) For the sake of *all that we ourselves hold dear*, and of *the world's order and peace* (20-21行目、第4段落)

(12) the world's *order* and *peace* (21行目、第4段落)

- (13) my people *at home* and my peoples *across the seas* (23-24行目、第5段落)
- (14) stand *calm, firm, and united* (24-25行目、第5段落)
- (15) If *one* and *all* we keep resolutely faithful to it (28行目、第5段落)
- (16) whatever *service* or *sacrifice* it may demand (28-29行目、第5段落)
- (17) May He *bless* and *keep* us all (30行目、最後の祈りのことば)

このリストには、慣用的あるいは定型的とされるような言い回しが含まれる一方で、見方によってはペアのリストには含まれない可能性のある表現も収められている。その根拠については若干の説明の必要があると思われる。

特定の表現がワードペアに含まれる／含まれないという論点はいくつかあるが、まず形態の面で関係するのは項目の数、すなわち2項目のものはペアだが、3項目以上のものをどう位置付けるのかといった点が挙げられる。上のリストで言えば(14) *stand calm, firm, and united* が3項目が結び付けられた表現である。

ワードペアを「単語と単語の組み合わせ」とするような定義への抵触も見られるかもしれない。例えば(1)の表現では明らかに *at home* と *overseas* とが対比されているが、これは語数で言えば「2語」と「1語」の組み合わせである。しかしながら、他の「1語」と「1語」の組み合わせのペアに比して、特段に不自然な感はなく、奇抜なものとも思えない。

さらに(3) *Over and over again* は同一の語が重ねられたもの、すなわちトートロジーであって、意味論的に言えば別の方面から考察すべきものなのかもしれない。

(9)と(10)、また(11)と(12)には、それぞれ重複している部分がある。それら2組のペアはいわば「入れ子構造」で、ペアの要素である一方の語句の中にまたペアがあるという複合的な構造を有している。ペアの数え方にもよるが、「当該スピーチにおいてペアが見られる箇所は15箇所、用例数は17例である」と、イコールにならないとも言える。

こういった多様な表現を一括して扱うべきかについては異論もあろうが、本論文は、前後で用いられている表現との関係性を見ることや別の同種の表現との比較などを通じて、ワードペアとそれに関連した表現に一貫した説明を試みることを目指すものである。したがって可能性のあるものをはじめに除外することはせず、できるだけ多くの表現をこのリストに含めて、以下に詳細に論じることにはしたいと思う。

3. 当該スピーチにおけるワードペア：その傾向と特徴

以下の考察では当該スピーチにおけるワードペア全体の傾向と特徴を探っていく。具体的には、1) ワードペアの語句は慣用的な組み合わせか、2) ワードペアの形態は固定化されたものか、3) スピーチの中で繰り返されたペアはあるか、あるとすればどのように繰り返されているのか、の3つの観点からの考察である。

具体的な方法としては、まずは衣笠にならない、Google検索を通じたワードペア用例の分析を行う。次に、それを補足する形で、英和辞典・英英辞典にワードペア用例の関連情報を見る。これは『リーダーズ英和辞典』に基づいた須部を参考にしている。最後に、それまでの2節を踏まえて、当該スピーチで繰り返されているペアの機能と効果を、テキストの文脈に基づいて分析する。

本章でのコーパス言語学の手法を用いた研究では、各ペアを調査(検索)した結果は以下のいずれか

になると予想される。これはあくまでも1つの目安であるが、慣用性（結び付けられた語句は頻繁に組み合わされるものか）と定型性（ここで言う定型とは、主に語順が決まっているかどうか）のそれぞれについて、予想される結果とそこから導き出されるペアの特徴などをあらかじめ示しておく。

「慣用的な語句の組み合わせ」に予想される結果

- ・ 検索結果は多く、当該スピーチ以外の用例も多数見られる。
- ・ フレーズとして辞書に掲載されている。

「慣用的でない語句の組み合わせ」に予想される結果

- ・ 検索されない。または検索されるが、示される結果は当該スピーチのことを紹介したものが中心となる。（この場合、そのペアは当該スピーチに独特の表現または特徴的な表現であると考えられる。）
- ・ フレーズとしては辞書に掲載されておらず、それらの語句の関連性を示すような記述も見られない。

「定型的な表現」に予想される結果

- ・ 語順を逆にして検索した場合に、検索結果の件数が大きく異なる。
- ・ 一方の語順でのみ、フレーズとして辞書に載っている。

「定型的でない表現」に予想される結果

- ・ 語順を逆にして検索してもほぼ同数になるなど、有意の差を認めることができない。
- ・ 両方の語順でフレーズとして辞書に載っている。

3. 1. Google検索を通じたワードペア用例の分析

- ・ 以下は2013年2月5日から10日にかけて日本版Googleを通してアクセスした結果に基づくものである。検索結果の件数および内容はその時点のものであり、今後も同じ結果が出ることを保証するものではない。
- ・ 主にイギリスでの用例を収集できるようにドメイン指定（site:ukを付加）して検索しているが、結果においてはイギリス英語のみが示されているとは限らない。
- ・ 検索の目的に合わせて、例えば検索結果が多すぎるケースではさらにフレーズ検索（引用符で括った検索）をするなど、適宜調整して検索した結果が含まれる。以下はそれらの内、特に本論に關係する点に絞ってまとめている。
- ・ 検索結果の件数に「約」とあるのは、Googleによって示される検索件数が推定値であるため。実数が判明した場合は別に示した。
- ・ 検索された内容を引用する際には、要点を明らかにするため適宜イタリックやボールドを用いたり、アンダーラインを付加するなどしている。
- ・ 参考として、Malkiel が挙げたいくつかのペアの中から、特に典型的と思われる *knife and fork*, *hammer and tongs*, *back and forth* の3例の検索結果（通常の検索、フレーズ検索、逆の語順の検索）をはじめに示す。

(参考1) *knife and fork*

「knife fork site:uk」	約982,000件
「“knife and fork” site:uk」	約111,000件
「“fork and knife” site:uk」	約15,400件

(参考2) *hammer and tongs*

「hammer tongs site:uk」	約72,200件
「“hammer and tongs” site:uk」	約9,560件
「“tongs and hammer” site:uk」	約1,760件

(参考3) *back and forth*

「back forth site:uk」	約27,300,000件
「“back and forth” site:uk」	約1,140,000件
「“forth and back” site:uk」	約197,000件

(1) every household of my peoples, both *at home* and *overseas*

- ・ 「at home overseas site:uk」 (引用符なしで検索した場合) の検索結果は約19,000,000件。
- ・ 一部をフレーズとした 「“at home” and overseas site:uk」 の検索結果は約847,000件。
- ・ これら2項目が共に用いられている例は多く、結果には “See list of Branches **at home** and **overseas**”、 “Paying **home** fees or **overseas** fees” などペアも見られる。
- ・ もっとも、「at home” and overseas site:uk」などの検索結果でも、overseas 以外の語、すなわち “at home and abroad” という別の組み合わせのペア例が結果の上位に示された。そちらのペアの方がむしろよく使われる表現で、慣用性が高いのではないかと推測される。この点については後で英和辞典・英英辞典を用いた分析において再検討する。

(2) *cross your threshold* and *speak to you myself*

- ・ 「“cross * threshold” speak site:uk」 は約1,990,000件。cross the threshold などを含む表現と speak とのヒット数自体は多い。詳しい使用状況を見るために検索結果上位100件を調べた限りでは、これら2項目が関連付けて使われている例は少なく、ジョージ6世のスピーチが引用されているいくつかのページを除けば、*The Independent* の記事で用いられた1例程度であった (“**cross the threshold** and **speak** in the House of Commons”)。
- ・ 検索結果からは、当該ペアはこのスピーチにおける特徴的な表現、すなわち他所にはあまり見られない2項目が組み合わせられた例ではないかと考えられる。

(3) *Over* and *over* again

- ・ フレーズ検索 「“over and over” site:uk」 は約2,100,000件、「“over and over again” site:uk」 約1,460,000件といずれも100万件を超える。形もほぼ *Over* and *over* again (または again なし) でヴァリエーションは少ないようである。慣用的かつ定型的な表現と言える。

(4) the differences between *ourselves* and *those who are now our enemies*

- ・「ourselves enemies site:uk」は約334,000件。この場合、検索結果の第9位が本論文でテキストとした当該PDFファイルであった。
- ・フレーズ検索「“ourselves and enemies” site:uk」では一致なし。
- ・なお構文上対応していると考えられるthose who ... が含まれる例はほとんど見られなかった。全体として当該ペアはこのスピーチに特徴的な表現の1つと考えられる。

(5) to disregard its *treaties* and its *solemn pledges*

- ・「treaty pledge site:uk」は約60,800件。結果には“treaty pledges”などの複合語や、“Barack Obama **pledges** to push nuclear New Start **treaty** through ...”のようにpledgeが動詞である例などが含まれていた。
- ・フレーズ検索「“treaty and pledge” site:uk」は8件（これは推定数ではなく実数）。やはりpledgeが動詞の例など、文脈から見て明らかにペアでないものも含まれている。複数形にした「“treaties and pledges” site:uk」は3件（実数）で、いずれもペアと思われる。もっとも、総じて検索結果件数は少なく、ペアとしての様態を測るには微妙な数字である。今後別方面からの裏付けが待たれるところであろう。

(6) which sanctions *the use of force*, or *threat of force*

- ・フレーズ検索「“use of force or threat of force” site:uk」は約3,180件。検索されたものを見ると、当該スピーチ以外にも多くのペア例が見られる。force を重複させない形での用例も多く「“use or threat of force” site:uk」は約20,000件。
- ・これらの検索結果からは、今回の基準で言うところの慣用的な表現にあたる例かと思われる。

(7) against the *sovereignty* and *independence* of other states

- ・「sovereignty independence site:uk」は約229,000件。ペアよりもむしろ3項目以上のものが組み合わせられた表現が顕著である（“the **sovereignty, independence, unity and territorial integrity** of Syria”、“**sovereignty, independence and self-sufficiency**” など）。
- ・フレーズ検索「“sovereignty and independence” site:uk」は約45,200件。フレーズ検索の場合は当該PDFが検索結果の5位に示されるが、他の用例にも十分な数があると言える。
- ・元々関連性が強い語句が結び付けられた例であり、慣用的な語句の組み合わせのペアであると推定される。

(8) the freedom of *our own country* and of *the whole British Commonwealth of Nations*

- ・一部をフレーズにして「“British Commonwealth of Nations” country site:uk」で検索した結果は約43,200件。検索結果上位の例を見ると、イギリス連邦にはどのような国が含まれるかといった内容を説明するサイトでよく用いられているようである（例えば“a **British Commonwealth of Nations**. ... Today's Commonwealth comprises 54 **countries**” など）。
- ・このペアは(1)および(13)のペアとおおよそ同じ内容を表していると考えられるが、この点については後で当該スピーチで繰り返されているペアを分析する際に扱うことにする。

(9) all hopes of *settled peace* and of *the security of justice and liberty* among nations

- ・「peace security site:uk」は約12,600,000件。
- ・フレーズ検索「“peace and security” site:uk」は約92,200件。逆の語順「“security and peace” site:uk」は約1,220,000件と、10倍程度多い。
- ・上の検索結果からは、peace と security は関連性が強くペアとしても多用されること、さらに security が先で peace が後といった語順固定の傾向が見られる。それに対して当該スピーチは逆の語順であり、その点に当該スピーチの独自性を見ることができる。security が後置された理由としては、次のペアに続くため、項目全体が長くなったため、などが考えられる。

(10) the security of *justice* and *liberty* among nations

- ・「justice liberty site:uk」は約1,190,000件。少なくとも検索結果上位100位の中には、当該スピーチを扱ったページは見られなかった。
- ・フレーズ検索「“justice and liberty” site:uk」は約2,600件。検索結果の第27位が当該PDFファイルであった。検索結果のヒット数で言えば逆の語順「“liberty and justice” site:uk」の方がやや多く、約10,700件。
- ・2語の関連性は強く、ペアとしても慣用的・定型的な表現であると考えられる。

(11) For the sake of *all that we ourselves hold dear*, and of *the world's order and peace*

- ・「dear order peace site:uk」は約1,160,000件。当該PDFは第5位。ペアに関係する要素を指定して「“all * dear” order peace site:uk」と検索すると約21,100,000件で、当該PDFが第1位。
- ・当該スピーチのことが検索上位に位置する点などを考慮すると、これらの語句の組み合わせは、このスピーチにおける特徴的なペアの例の1つと考えられる。

(12) the world's *order* and *peace*

- ・「order peace site:uk」は約9,550,000件。
- ・フレーズ検索「“order and peace” site:uk」は約433,000件。第1位が当該PDFとなる。逆の語順「“peace and order” site:uk」は約484,000件とほぼ同数の結果。
- ・慣用的な語句の組み合わせではあるが、語順はこの結果からは半々であるとのこと。この点については後で英和辞典・英英辞典を用いた分析において再検討する。

(13) my people *at home* and my peoples *across the seas*

- ・このペアに関してはジョージ5世の王妃（ジョージ6世の母）や、英国王配エディンバラ公フィリップ殿下が語ったとされる言葉に見られる例も検索されたが、それらについての情報は少なく、確かなものかどうかは不明であった。
- ・同種の語句の組み合わせの(1)との比較だが、こちらのペアの方が、検索結果の件数が少なく、また当該スピーチが検索結果に示される際に上の順位になることが多かった。「at home across the seas site:uk」は約188,000件で、1位が当該PDF、5位がBBCの戦争関連の記事。「“at home” “across the seas” site:uk」と一部をフレーズにすると約18,700件で、1位が当該PDF、2位がBBCの戦争関連の記事、など。したがって、今回の基準に従うならば、同種の語句の組み合わせに比べて、慣用性はやや低く、このスピーチの独自性が出た表現であると推定される。

(14) stand *calm, firm, and united*

- ・「calm firm united site:uk」は約165,000件。検索結果上位にはこのスピーチを取り上げたページが並ぶ。2位にはBBCの記事、3位には *The Guardian*、6位には当該PDF、15位には *The Times*、17位には再びBBC（2位のものとは別の記事）といった具合である。
- ・上記の検索結果からは、当該ペアはこのスピーチに特徴的な表現、あるいはむしろ「このスピーチで用いられたことが有名」「このスピーチを代表するような表現」といったものではないかと推測される。例えば17位にヒットしたBBCの記事⁴では、本文前のリードに、このフレーズが使われている。
- ・さらに、この3つ組の表現に含まれる2語ずつが、ペアとして使われているかどうかの検索を行った。結果としては下に示すように、頻度や語順の面での傾向の違いは見られるが、総じて2語ずつがペアとして広く使われていることが確認できた。この3つ組の表現は、既存のペアを組み合わせたような表現であると分析される。いくつかの先例を踏まえつつ⁵、それらを上手く利用して表現されたと言えるのではないだろうか。

「calm firm site:uk」	約739,000件
「“calm and firm” site:uk」	約92,700件
「“firm and calm” site:uk」	約93,900件

「calm united site:uk」	約4,410,000件
「“calm and united” site:uk」	約1,800,000件
「“united and calm” site:uk」	7件（実数）

「firm united site:uk」	約11,700,000件
「“firm and united” site:uk」	約1,340,000件
「“united and firm” site:uk」	約104,000件

(15) If *one and all* we keep resolutely faithful to it

- ・「one all site:uk」は約272,000,000件。上位の多くは“one for all”。
- ・フレーズ検索「“one and all” site:uk」は約295,000件。これに対して逆の語順「“all and one” site:uk」は約6,560,000件と意外にも多いが、これは偶然に並んだだけの例も検索されてしまっているためである。例えば“after **all, and one** I always ...”といったコンマで区切られたものが上位100件中30件もあるなど、明らかに除外すべきケースも多い。この辺りはGoogle検索による調査の限界とも思われ、基本的な語句のみからなる表現の頻度や傾向を探ることが困難な状況である。

(16) whatever *service or sacrifice* it may demand

- ・「service sacrifice site:uk」は約1,410,000件。
- ・フレーズ検索「“service or sacrifice” site:uk」は約11,400件、検索結果に当該スピーチのことが最初に出てくるのは第10位、*The British Journal of Nursing* の記事。逆の語順「“sacrifice or service” site:uk」は

4 http://news.bbc.co.uk/2/hi/special_report/1999/08/99/world_war_ii/429704.stm

5 父ジョージ5世は第一次世界大戦時に“stand *united, calm and resolute*”と語ったとされる。
http://www.bbc.co.uk/history/worldwars/wwone/mirror01_01.shtml

約8,010件。また接続詞を and にした「“service and sacrifice” site:uk」は約105,000件。逆の語順「“sacrifice and service” site:uk」は約54,500件。

- ・ 2項目の関連性は強く、さらに頭韻的な結び付きも有している。ただし検索結果からは異なる接続詞 (and, or)、語順の異同等ヴァリエーションが示されており、定型句といったほどではない。

(17) May He *bless* and *keep* us all

- ・ 「bless keep site:uk」は約1,600,000件。
- ・ フレーズ検索「“bless and keep” site:uk」は約860,000件。逆の語順「“keep and bless” site:uk」は約51,700件。逆の語順は明らかに少なく、当該スピーチで用いられた語順が主流であると言える。

ここまでの結果を暫定的にまとめると、判断が保留されるものを除き、Google検索の結果から見た各ペアの慣用性と定型性は以下ようになる。

慣用的あるいは定型的と考えられる表現：(3) (6) (7) (10) (12) (16) (17)

このスピーチに特徴的と考えられる表現：(2) (4) (11) (13)

なお (9) は慣用的ではあるが定型とは逆の語順で用いられていると推定される例、さらに (14) は慣用的な語句が組み合わせられてはいるが、その組み合わせ方が独特と考えられる例であった。

3. 2. 英和辞典・英英辞典に見るワードペア用例

- ・ 以下は各ペアの要素である語句を英和辞典・英英辞典で検索した結果に基づいてまとめたものである。それぞれの語句の見出しの下に含まれる、語義説明、例文、同意語・反意語、成句などにおいて、当該ペアに関係すると考えられる箇所を抜き出した。ここではペアの成り立ちに関連するような記載が見られなかったものは省いて、何からの記載があったペアに限って記述することにする。具体的には (1)、(3)、(7)、(9)、(10)、(12)、(15)、(17) のペアである。
- ・ 参照した辞典は以下の通り。『CD-ROM版 ランダムハウス英語辞典』（以下、ランダムハウス）、『EPWING版 リーダーズ+プラス V2』（リーダーズ）、『CD-ROM版 ジーニアス英和大辞典』（ジーニアス）、*Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* [5th Edition] (COBUILD5)、*Longman Dictionary of Contemporary English* [5th Edition] (LDOCE5)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* [8th Edition] (OALD8)。
- ・ 英英辞典には、CD-ROMやDVD-ROMではシソーラス、コロケーション、比較的小規模なコーパスでの例文検索などを別途提供しているものもあるが、ここでは基本的な辞書検索によって得られた結果のみを参照することにする。
- ・ 引用する際には、特殊記号などの再現できないものは省略した。またイタリックやボールドなどは辞典によって使い方が異なるため、基本的には省略し、要点となるものについては別途こちらで付加している。

(1) every household of my peoples, both *at home* and *overseas*

- ・ Google検索では *overseas* ではなく *abroad* とのペアも見られたが、これらの辞典でも *abroad* との関

連について多く記述されている。COBUILD5 と LDOCE5 には at home と abroad とのペアが見られる（例えば “She gives frequent performances of her work, both *at home* and *abroad*...”、COBUILD5）。またランダムハウスとジーニアスにはペアの例はないが、at home の反意語として abroad が挙げられている。これらに対して OALD8 では当該ペア、すなわち at home と overseas とのペアが見られる (“The product is sold both *at home* and *overseas*”)。

- ・このように、at home のペアの相手として abroad と overseas のどちらが主流かについて「揺れ」が見られる点は、Google検索で見た傾向と一致する。

(3) *Over and over again*

- ・これら全ての英和辞典・英英辞典にフレーズとして記載されている定型句である。

(7) *against the sovereignty and independence of other states*

- ・LDOCE5 や OALD8 では sovereign (形容詞) の語義説明の中に independent が使われている。例えば OALD8 “(of a country or state) free to govern itself; completely independent”。
- ・逆に independent や independence の方には、sovereign や sovereignty に直接繋がるような記述は見られず、ペアとしての慣用性（語句の繋がり方）には少し疑問が残った。

(9) *all hopes of settled peace and of the security of justice and liberty among nations*

- ・Google検索では、語順としては security が先（検索結果が多い）という傾向が見られたが、辞書検索からはそのような結果は得られなかった。ランダムハウスには “Japan’s *peace and security*” という例文が載っており、peace が先である。それ以外の辞典には peace と security とのペアの例は見られなかった。
- ・peace を含むペアとしては *peace and war* (リーダーズとジーニアスに見られる。また OALD8 には逆の語順 *war and peace* が見られる)、*peace and quiet* (全ての辞典に記載あり) などが多く使われるようである。
- ・このように、英和辞典・英英辞典の検索結果からは、当該ペアの慣用性と定型性がやや疑われる結果となった。

(10) *the security of justice and liberty among nations*

- ・OALD8 には liberty に “the fight for *justice and liberty*” という例文があった。
- ・当該ペアは定型的一样と思われるが、OALD8 を除く辞典には記載がないため十分なデータとは言えない。検証のためには、ここで用いたものとは別の手法による今後の調査が必要であろう。

(12) *the world’s order and peace*

- ・orderly (形容詞) の中に言及があるものが多い。ジーニアス、LDOCE5、OALD8 では語義説明の中に peaceful が使われている。さらに COBUILD5 と OALD8 にはペアの例文も見られた（それぞれ “*orderly and peaceful*”、“in a *peaceful and orderly* fashion”）。
- ・この結果からは語句の組み合わせ自体は慣用性が高いと言える。反面、語順は逆のものも見られ、定型句かどうかは断定できない。

(15) If *one* and *all* we keep resolutely faithful to it

・COBUILD5 を除く 5 つの辞典にフレーズとしての記載がある。なお逆の語順 (**all* and *one*) は、どの辞典にも見られない。

(17) May He *bless* and *keep* us all

・LDOCE5 には “The Lord *bless* you and *keep* you” が、OALD8 には “May the Lord *bless* you and *keep* you” が、それぞれ *keep* の例文に含まれていた。

まとめると、全体としてはGoogle検索を裏付ける結果であったと言えるが、ペアによっては、あらかじめ予想されたほどの慣用性や定型性ではなかったというケースが見られた。

3. 3. 当該スピーチで繰り返されているペアについて

当該スピーチにおいては単純に繰り返されたペアはない。しかし以下の 2 組は、ペアの相手を変えたり、別の表現が同じ内容を指したりしながら、特定の内容あるいは語句が繰り返されているものである。おそらく一度聞いただけではそれと気付かない聴者もいたのではないかと思われるほどに、これらの繰り返しの表現は入念に使用（または配置）されていると考えられる。以下、一部を補足して、該当するペアを再掲する。

【1 組目】

- (1) every household of my peoples, both *at home* and *overseas*
- (8) the freedom of *our own country* and of *the whole British Commonwealth of Nations*
- (13) my people *at home* and my peoples *across the seas*

【2 組目】

- (9) all hopes of *settled peace* and of *the security of justice and liberty among nations*
- (12) [For the sake of all that we ourselves hold dear, and] the world's *order* and *peace*

まず 1 組目について、(1) と (13) は言い回しを少し変えたもので、その間にある (8) は文脈からおおよそ同じ内容を指すと考えられるものである。各ペアがスピーチの中で使われている位置はそれぞれ第 1 段落・第 3 段落・第 5 段落であり、序盤・中盤・終盤と均等に配置されている。この繰り返しは、いわばスピーチ全体の構成の基盤となるような位置付けではないかと推測される。内容としても、遠く離れている 1 人 1 人に、国王自らが（ラジオを通じてだが）直接に話しかけるといった「演出」に一役買っていると考えられる。

2 組目では *peace* が繰り返されているのだが、「入れ子構造」のペアに含まれていたり内容的に重要と見られる語句が他にも散見されるために、ほとんど繰り返しに気付かれないほどである。しかしこれらは第 3 段落から第 4 段落にかけての、スピーチがクライマックスに向けて高まっていくような独特のリズムが感じられる箇所でも用いられているペアでもある。

これら 2 種類の繰り返しが終わった直後に、Google検索の節で指摘した、当該スピーチを代表する表現の 1 つである (14) *stand calm, firm, and united* が用いられている。ペアの繰り返しによって築かれたこの

ような枠組みがあるからこそ、前述したように一つ一つの語句は決して際立ったものではない3つ組の表現が、聴者に強い印象をもって伝わったのではないだろうか。

4. むすび

本論文で見たワードペアの17例という用例数は、網羅的にワードペアの特徴を記述するにも、実証的にそれを検証するにも、やや不十分な数であろう。しかしながら、本論文における主張を裏付けるには、これらの用例から見て取ることができる特徴で充分であると思われる。

繰り返しになるが、ワードペアは慣用・定型に尽きるという見方もあるのが現状である。それに対してジョージ6世のスピーチに見られるワードペアの用例は、以下にまとめたように、これまでのワードペアの見方とは反する面があった。総じて当該スピーチにおけるワードペアには独自性があり、ジョージ6世の言説を聴者に強く印象付ける大きな効果があったと考えられる。

- 1) 慣用的な語の組み合わせだけでなく、ほとんど他所では見られない独自の組み合わせも使われている。(*cross your threshold and speak to you myself, ourselves and those who are now our enemies* など)
- 2) よく見られるペアとは逆の語順で用いられたり、別の語句が付加されるなど、“固定化された表現”とは言い難い面を持つ。(*peace and security, calm, firm, and united* など)
- 3) 単純に同じペアが繰り返されることはなく、ヴァリエーションをもって、重要な意味を表すペアが繰り返されている。(*at home and overseas/at home and across the seas, peace and security/order and peace*)

ここまでの分析を通じて、ペアによっては（あるいはその使用例によっては）、語句の結び付きの強弱や語順が固定されているかどうかの違いが見られることがわかった。これを一概に「慣用・定型」として扱うのは無理がある。少なくとも、ワードペアの慣用や定型の度合いには段階性が見られることを認めるべきである。この点に留意した上で、言語表現あるいは表現技法としてもワードペアを考察し、その機能や効果を具体的に明らかにしていくことが必要であると考えられる。

参考文献・参照文献

- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku : Turun Yliopisto, 1975.
- Malkiel, Yakov. "Studies in Irreversible Binomials." *Lingua* 8 (1959) : 113-160.
- 衣笠忠司『Google検索による英語語法学習・研究法』開拓社言語・文化選書21、開拓社、2010.
- 須部宗生「語順固定の英語対句表現の一考察」静岡産業大学国際情報学部研究紀要1（1999）：39-68.
- マーク・ローグ、ピーター・コンラディ著、安達まみ訳『英国王のスピーチ 王室を救った男の記録』岩波書店、2012.

英和辞典・英英辞典（CD-ROM版等を含む）

- 『CD-ROM版 ランダムハウス英語辞典 [第2版] Windows版』小学館、1998.
- 『EPWING版 リーダーズ+プラス V2』研究社、2000.
- 『CD-ROM版 ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2002.
- Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary* [5th Edition]. HarperCollins Publishers, 2006.（『コウビルド英英辞典』改訂第5版 CD-ROM付、日本出版貿易）
- Longman Dictionary of Contemporary English* [5th Edition]. Pearson Longman, 2009.（『ロングマン現代英英辞典』5訂版 DVD-ROM付、桐原書店）
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* [8th Edition]. OUP, 2010.（『オックスフォード現代英英辞典』第8版 DVD-ROM付、旺文社）

映像資料（映画作品、ドキュメンタリー）

- 『英国王のスピーチ』（トム・フーパー監督、2010年. Blu-ray発売元：ギャガ）
- 『英国王のスピーチの真実－ジョージ6世の素顔－』（アラン・バイロン監督、2011年. DVD発売元：ギャガ）